

奇怪な再会

芥川龍之介

青空文庫

一

お蓮が本所の横網に囲われたのは、明治二十八年の初冬だつた。

妾宅は御藏橋の川に臨んだ、極く手狭な平家だつた。ただ庭先から川向うを見ると、今は両国停車場になつてゐる御竹倉一帯の藪や林が、時雨勝な空を遮つていたから、比較的町中らしくない、閑静な眺めには乏しくなかつた。が、それだけにまた旦那が来ない夜などは寂し過ぎる事も度々あつた。「婆や、あれは何の声だらう？」

「あれでござりますか？　あれは五位鷺でござりますよ。」

お蓮は眼の悪い傭い婆さんとランプの火を守りながら、氣味悪そうにこんな会話を交換する事もないではなかつた。

旦那の牧野は三日にあげず、昼間でも役所の帰り途に、陸軍一等主計まきのの軍服を着た、逞しい姿を運んで來た。勿論日が

暮れてから、厩橋向うの本宅を抜けて來る事も稀ではなかつた。牧野はもう女房ばかりか、男女二人の子持ちでもあつた。

この頃丸髻まるまげに結つたお蓮は、ほとんど宵毎に長火鉢を隔てながら、牧野の酒の相手をした。二人の間の茶ぶ台には、大抵たいていこのわたらすみや海鼠腸が、小綺麗な皿小鉢を並べていた。

そう云う時には過去の生活が、とかくお蓮の頭の中に、はつき

り浮んで来勝ちだつた。彼女はあの賑やかな家や朋輩たちの顔を思い出すと、遠い他国へ流れて來た彼女自身の便りなさが、一層心に沁みるような気がした。それからまた以前よりも、ますます肥つて來た牧野の体が、不意に妙な憎惡の念を燃え立たせる事も時々あつた。

牧野は始終愉快そうに、ちびちび杯を嘗めていた。そして何か冗談じょうだんを云つては、お蓮の顔を覗きこむと、突然大声に笑い出すのが、この男の酒癖さけくせの一つだつた。

「いかがですな。お蓮の方かた、東京も満更まんざらじやありますまい。」

お蓮は牧野にこう云われても、大抵は微笑を洩らしたまま、酒の燶かんなどに気をつけていた。

役所の勤めを抱えていた牧野は、滅多に泊つて行かなかつた。

枕もとに置いた時計の針が、十二時近くなつたのを見ると、彼はすぐメリヤスの襯衣シャツへ、太い腕を通し始めた。お蓮は自堕落じだらくな立て膝たてひざをしたなり、いつもただぼんやりと、せわしなそうな牧野の帰り仕度ものうへ、懶い流し眼りゅうしめんを送つていた。

「おい、羽織よなわをとつてくれ。」

牧野は夜中のランプの光に、脂あぶらの浮いた顔を照させながら、もどかしそうな声を出す事もあつた。

お蓮は彼を送り出すと、ほとんど毎夜の事ながら、気疲れを感じにはいられなかつた。と同時にまた独りになつた事が、多少は寂しくも思われるのだつた。

雨が降つても、風が吹いても、川一つ隔てた藪や林は、心細い響を立て易かつた。お蓮は酒臭い夜着の襟に、冷たい頬を埋めながら、じつとその響に聞き入つていた。こうしている内に彼女の眼には、いつか涙が一ぱいに漂つて来る事があつた。しかしふだんは重苦しい眠が、——それ自身惡夢のような眠が、間もなく彼女の心の上へ、昏々と下つて来るのだつた。

二

「どうしたんですよ？ その傷は。」

ある静かな雨降りの夜、お蓮は牧野の酌をしながら、彼の右の

頬へ眼をやつた。そこには青い剃^{そりあと}痕の中に、大きな蚯蚓^{みみずばれ}脹が出来ていた。

「これか？ これは^{かかあ}嘆に引つ搔^かかれたのさ。」

牧野は冗談かと思うほど、顔^{かおいろ}色も声もけろりとしていた。

「まあ、嫌な御新造^{ごしんぞ}だ。どうしてまたそんな事をしたんです？」

「どうしてもこうしてもあるものか。御^{おさだま}定りの角^{つの}をはやしたの

さ。おれでさえこのくらいだから、お前なぞが遇つて見る。たち

まち喉^{のどぶえ}笛^{のぶえ}へ噛みつかれるぜ。まず早い話が^{まんしゆうけん}満洲^{まんしゆう}犬^{けん}さ。」

お蓮はくすくす笑い出した。

「笑い事じやないぜ。ここにいる事が知れた日にや、明日^{あした}にも押^あしがけて来ないものじやない。」

牧野の言葉には思いのほか、眞面目まじめ そうな調子も交つていた。

「そうしたら、その時の事ですわ。」

「へええ、ひどくまた 度胸どきようが好いな。」

「度胸が好い訳じやないんです。私の國の人間は、——」

お蓮は考え深そうに、長火鉢あきらわたしの炭火すみびへ眼を落した。

「私の國の人間は、みんな諦めあきらが好いんです。」

「じゃお前は焼かないと云う訳か?」

牧野の眼にはちよいとの間あいだ 狡猾こうかつ そんな表情が浮んだ。

「おれの國の人間は、みんな焼くよ。就中なかんずく おれなんぞは、——」

——

そこへ婆さんが勝手から、あつらえ物の蒲燒かばやき を運んで來た。

その晩牧野は久しぶりに、妾宅へ泊つて行く事になつた。

雨は彼等が床とこへはいつてから、霧の音に変り出した。お蓮は牧野が寝入つた後のち、何故かいつまでも眠られなかつた。彼女の冴えた眼の底には、見た事のない牧野の妻が、いろいろな姿を浮べたりした。が、彼女は同情は勿論、憎惡も嫉妬も感じなかつた。ただその想像に伴うのは、多少的好奇心ばかりだつた。どう云う夫婦喧嘩をするのかしら。——お蓮は戸の外の藪や林が、霧にざわめくのを気にしながら、眞面目にそんな事も考えて見た。

それでも二時を聞いてしまうと、ようやく眠氣ねむけがきざして來た。
——お蓮はいつか大勢おおぜいの旅客と、薄暗い船室に乗り合つてゐる。円い窓から外を見ると、黒い波の重かさなつた向うに、月だか太陽だ

か判然しない、妙に赤光のする球があつた。乗合いの連中はどうした訳か、皆影の中に坐つたまま、一人も口を開くものがな。お蓮はだんだんこの沈黙が、恐しいような気がし出した。その内に誰かが彼女の後へ、歩み寄つたらしいけはいがする。彼女は思わず振り向いた。すると後には別れた男が、悲しそうな微笑を浮べながら、じつと彼女を見下している。……

「金さん。」

お蓮は彼女自身の声に、明け方の眠から覚まされた。牧野はやはり彼女の隣に、静かな呼吸を続けていたが、こちらへ背中を向けた彼が、実際寝入つていたのかどうか、それはお蓮にはわからなかつた。

三

お蓮に男のあつた事は、牧野も気がついてはいたらしかつた。が、彼はそう云う事には、頓着する氣色も見せなかつた。また実際男の方でも、牧野が彼女にのぼせ出すと同時に、ぱつたり遠のいてしまつたから、彼が嫉妬を感じなかつたのも、自然と云えれば自然だつた。

しかしお蓮の頭の中には、始終男の事があつた。それは恋しいと云うよりも、もつと残酷な感情だつた。何故男が彼女の所へ、突然足踏みもしなくなつたか、——その訳が彼女には呑みこめな

かつた。勿論お蓮は何度となく、変り易い世間の男心に、一切の原因を見出そうとした。が、男の来なくなつた前後の事情を考えると、あながちそうばかりも、思われなかつた。と云つて何か男の方に、やむを得ない事情が起つたとしても、それも知らさずに別れるには、彼等二人の間柄は、余りに深い馴染みだつた。では男の身の上に、不慮の大変でも襲つて来たのか、——お蓮はこう想像するのが、恐しくもあれば望ましくもあつた。……

男の夢を見た二三日後(のち)、お蓮は銭湯(せんとう)に行つた帰りに、ふと「身上判断(みのうえはんぱん)、玄象道人(げんじょうどうじん)」と云う旗が、ある格子戸造りの家に出してあるのが眼に止まつた。その旗は算木(さんぎ)を染め出す代りに、赤い穴錢(あなせん)の形を描いた、余り見慣れない代物(しろもの)だつた。が、

お蓮はそこを通りかかると、急にこの玄象道人に、男が昨今どうしているか、占つて貰おうと云う気になつた。

案内に応じて通されたのは、日当りの好い座敷だつた。その上主人が風流なのか、支那の書棚だの蘭の鉢だの、煎茶家めいた裝飾があるのも、居心の好い空氣をつくつていた。

玄象道人は頭を剃つた、恰幅の好い老人だつた。が、金歯を嵌めていたり、巻煙草をすばすばやる所は、一向道人らしくもない、下品な風采を具えていた。お蓮はこの老人の前に、彼女には去年行方知れずになつた親戚のものが一人ある、その行方を占つて頂きたいと云つた。

すると老人は座敷の隅から、早速二人のまん中へ、紫檀の小机

を持ち出した。そうしてその机の上へ、恭しそうに青磁の香炉や金欄の袋を並べ立てた。

「その御親戚は御幾つですか？」

お蓮は男の年を答えた。

「ははあ、まだ御若いな、御若い内はとかく間違が起りたがる。
手前のような老爺になつては、——」

玄象道人はじろりとお蓮を見ると、二三度下びげた笑い声を出した。

「御生れ年も御存知かな？　いや、よろしい、卯のいっぽく一白になります。」

老人は金欄の袋から、穴錢あなせんを三枚取り出した。穴錢は皆一枚

ずつ、薄赤い絹に包んであつた。

「私の占いは擲錢トと云います。擲錢トは昔漢のかん京けいぼう房が、始めて筮ぜいに代えて行つたとある。御承知でもあろうが、筮と云う物は、一爻に三変の次第があり、一卦に十八変の法があるから、容易に吉凶を判じ難い。そこはこの擲錢トの長所でな、……」

そう云う内に香炉からは、道人の燻べた香の煙が、明あかるい座敷の中に上り始めた。

四

道人は薄赤い絹を解いて、香炉の煙に一枚ずつ、中の穴銭あなせん

軸を燻じた後、今度は床に懸けた軸の前へ、丁寧に円い頭を下げた。軸は狩野派が描いたらし、伏羲文王周公孔子の四大聖人の画像だつた。

「惟皇たる上帝、宇宙の神聖、この宝香を聞いて、願くは降臨を賜え。——猶予未だ決せず、疑う所は神靈に質す。請う、皇懃を垂れて、速に吉凶を示し給え。」

そんな祭文が終つてから、道人は紫檀(しだん)の小机の上へ、ぱらりと三枚の穴銭を撒いた。穴銭は一枚は文字が出たが、跡の二枚は波の方だつた。道人はすぐに筆を執つて、巻紙にその順序を写した。

銭を擲げては陰陽を定める、——それがちょうど六度続いた。

お蓮はその穴銭の順序へ、心配そうな眼を注いでいた。

「さて——と。」

擲^{てきせん}銭^{せん}が終つた時、老人は巻^{まき}紙^{がみ}を眺めたまま、しばらくはただ考えていた。

「これは雷^{らい}水^{すい}解^{かい}と云う卦^けでな、諸事思うようにはならぬとあります。」

お蓮は怯^おづ怯^おづ三枚の銭から、老人の顔へ視線を移した。

「まずその御親戚とかの若い方にも、二度と御遇^{おあ}いにはなれそうもないな。」

玄象道人^{げんじょうどうじん}人はこう云いながら、また穴銭を一枚ずつ、薄赤い絹に包み始めた。

「では生きては居りませんのでしょうか？」

お蓮は声が震えるのを感じた。「やはりそうか」と云う気もちが、「そんな筈はない」と云う気もちと一しょに、思わず声へ出たのだった。

「生きていられるか、死んでいられるかそれはちと判じ悪いが、——とにかく御遇にはなれぬものと御思いなさい。」「どうしても遇えないでございましょうか？」

お蓮に駄目だめを押された道人は、金欄きんらんの袋の口をしめると、脂あぶら

ぎつた頬のあたりに、ちらりと皮肉らしい表情が浮んだ。

「滄桑そうそうの変へん」と云う事もある。この東京が森や林にでもなつたら、御遇いになれぬ事もありますまい。——とまず、卦けにはな、卦に

はちゃんと出ています。」

お蓮はここへ来た時よりも、一層心細い気になりながら、高い見 料 を払つた後、 々家へ帰つて來た。

その晩彼女は長火鉢の前に、ぼんやり頬杖をついたなり、鉄瓶の鳴る音に聞き入つていた。玄象道人の占いは、結局何の解釈をも与えてくれないと同様だつた。いや、むしろ積極的に、彼女が密かに抱いていた希望、——たといいかにはかなくとも、やはり希望には違いない、万一を期する心もちを打ち碎いたのも、同様だつた。男は道人がほのめかせたように、実際生きていないのであろうか？ そう云えば彼女が住んでいた町も、当時は物騒な最中だつた。男はお蓮のいる家へ、不相変通つて来る途中、

何か間違いに遇つたのかも知れない。さもなければ忘れたように、ふつつり来なくなつてしまつたのは、——お蓮は白粉を刷いた片頬に、炭火の火照りを感じながら、いつか火箸（みいだ）を弄（もてあそ）んでいる彼女自身を見出した。

「金、金、金、——」

灰の上にはそう云う字が、何度も書かれたり消されたりした。

五

「金、金、金、——」

そうお蓮（れん）が書き続けていると、台所にいた雇（やとい）婆（ばあ）さんが、突

然かすかな叫び声を洩らした。この家うちでは台所と云つても、障子一重開けさえすれば、すぐにそこが板の間まだつた。

「何？ 婆や。」

「まあ御新さん。いらしつて御覧なさい。ほんとうに何だと思つたら、——」

お蓮は台所へ出て行つて見た。

竈かまどが幅をとつた板の間には、障子しようじに映るランプの光が、物静かな薄暗をつくつていた。婆さんはその薄暗の中に、半天はんてんの腰かがを屈めながら、ちょうど今何か白い獸けものを抱き上げている所だつた。

「猫かい？」

「いえ、犬でござりますよ。」

両袖を胸に合せたお蓮は、じつとその犬を覗きこんだ。犬は婆さんに抱かれたまま、水々しい眼を動かしては、頻に鼻を鳴らしている。

「これは今朝ほど五味溜めの所に、啼いていた犬でございますよ。
——どうしてはいつて参りましたかしら。」

「お前はちつとも知らなかつたの？」

「はい、その癖ここにさつきから、御茶碗を洗つて居りましたん
ですが——やつぱり人間眼の悪いと申す事は、仕方のないもんで
ござりますね。」

婆さんは水口の腰障子を開けると、暗い外へ小犬を捨てよう
とした。

「まあ御待ち、ちよいと私も抱いて見たいから、——」

「御止およしなさいましよ。御召しでもよござれといけません。」

お蓮は婆さんの止めるのも聞かず、両手にその犬を抱きとつた。犬は彼女の手の内に、ぶるぶる体を震ふるさせていた。それが一瞬間過去の世界へ、彼女の心をつれて行つた。お蓮はあの賑かな家にいた時、客の来ない夜は一しょに寝る、白い小犬を飼つていたのだつた。

「可哀かわいそうに、——飼つてやろうかしら。」

婆さんは妙な瞬またたきをした。

「ねえ、婆や。飼つてやろうよ。お前に面倒はかけないから、——」

お蓮は犬を板の間まへ下おろすと、無邪氣な笑顔を見せながら、もう肴さかなでも探してやる気か、台所の戸棚とだなに手をかけていた。

その翌日から妾宅には、赤い頸環くびわに飾られた犬が、畳の上にいるようになつた。

綺麗好きな婆さんは、勿論もちろんこの変化を悦ばなかつた。殊に庭

へ下りた犬が、泥足のまま上あがつて来なぞすると、一日腹を立てている事もあつた。が、ほかに仕事のないお蓮は、子供のように犬を可愛がつた。食事の時にも膳ぜんの側には、必ず犬が控えていた。

夜はまた彼女の夜着の裾に、まろまろ寝て いる犬を見るのが、文字通り毎夜の事だつた。

「その時分から私は、嫌だ嫌だと思つていましたよ。何しろ薄暗

いランプの光に、あの白犬が御新造ごしんぞうの寝顔をしげしげ見ていた事もあつたんですから、――

婆さんがかれこれ一年の後のち、私の友人のKと云う医者に、こんな事も話して聞かせたそうである。

六

この小犬に悩まされたものは、雇やといばあ婆さん一人ではなかつた。牧野も犬が畳の上に、寝そべつているのを見た時には、不快そうに太い眉まゆをひそめた。

「何だい、こいつは?――畜ちく生しよう。あつちへ行け。――

陸軍主計の軍服を着た牧野は、邪慳に犬を足蹴にした。犬は彼が座敷へ通ると、白い背中の毛を逆立てながら、無性に吠え立て始めたのだつた。

「お前の犬好きにも呆れるぜ。」

晩酌の膳についてからも、牧野はまだ忌々しそうに、じろじろ犬を眺めていた。

「前にもこのくらいなやつを飼っていたじゃないか？」

「ええ、あれもやつぱり白犬でしたわ。」

「そう云えばお前があの犬と、何でも別れないと云い出したのにや、随分手こづらされたものだつたけ。」

お蓮は膝の小犬を撫でながら、仕方なさそうな微笑を洩らした。

汽船や汽車の旅を続けるのに、犬を連れて行く事が面倒なのは、
彼女にもよくわかつていた。が、男とも別れた今、その白犬を後
に残して、見ず知らずの他国へ行くのは、どう考えて見ても寂し
かつた。だからいよいよ立つと云う前夜、彼女は犬を抱き上げて
は、その鼻に頬をすりつけながら、何度も止めどない啜り泣きを
呑みこみ呑みこみしたものだつた。……

「あの犬は中々利巧だつたが、こいつはどうも莫迦らしいな。第
一人相にんそうが、——人相じやない。犬相けんそうだが、——犬相が甚だ平
凡だよ。」

もう酔よいのまわつた牧野は、初めの不快も忘れたように、刺身さしみ
ぞを犬に投げてやつた。

「あら、あの犬によく似ているじゃありませんか？　違うのは鼻の色だけですわ。」

「何、鼻の色が違う？　妙な所がまた違つたものだな。」

「この犬は鼻が黒いでしょう。あの犬は鼻が赭うござんしたよ。」

お蓮は牧野の酌をしながら、前に飼つていた犬の鼻が、はつきりと眼の前に見えるような気がした。それは始終涎に濡れた、ちようど子持ちの乳房のように、鳶色の斑がある鼻づらだつた。

「へええ、して見ると鼻の赭い方が、犬では美人の相なのかも知れない。」

「美男ですよ、あの犬は。これは黒いから、醜男ですわね。」

「男かい、二匹とも。ここのかへ来る男は、おればかりかと思つ

たが、——こりやちと怪しからんな。」

牧野はお蓮の手を突つきながら、彼一人上機嫌に笑い崩れた。

しかし牧野はいつまでも、その景気を保つていられなかつた。

犬は彼等が床とこへはいると、

ふるぶすまひとえ 古 襦

一重隔てた向うに、何度も悲

しそうな声を立てた。のみならずしまいにはその襦ふすまへ、がりがり

前足の爪をかけた。牧野は深夜のランプの光に、妙な苦くしおう笑を浮

べながら、どうどうお蓮へ声をかけた。

「おい、そこを開けてやれよ。」

が、彼女が襦を開けると、犬は存外ゆつくりと、二人の枕もと

へはいつて來た。そして白い影のように、そこへ腹を落着けた
なり、じつと彼等を眺め出した。

お蓮は何だかその眼つきが、人のような気がしてならなかつた。

七

それから二三日経つたある夜、お蓮は本宅を抜けて來た牧野と、近所の寄席へ出かけて行つた。

手品、剣舞、幻燈、大神樂——そう云う物ばかりかかつていた寄席は、身動きも出来ないほど大入りだつた。二人はしばらく待たされた後、やつと高座には遠い所へ、窮屈な腰を下す事が出来た。彼等がそこへ坐つた時、あたりの客は云い合わせたよう、丸髷に結つたお蓮の姿へ、物珍しそうな視線を送つた。

彼女にはそれが晴がましくもあれば、同時にまた何故か寂しくもあつた。

高座には明るい吊ランプの下に、白い鉢巻をした男が、長い抜き身を振りまわしていた。そうして樂屋から朗々と、「踏み破る千山万岳の煙」とか云う、詩をうたう声が起つていた。お蓮にはその剣舞は勿論、詩吟も退屈なばかりだつた。が、牧野は巻煙草へ火をつけながら、面白そうにそれを眺めていた。

剣舞の次は幻燈だつた。高座に下した幕の上には、日清戦争の光景が、いろいろ映つたり消えたりした。大きな水柱を揚げながら、「定遠」の沈没する所もあつた。敵の赤児を抱いた樋口大尉が、突撃を指揮する所もあつた。大勢の客はそ

の画の中に、たまたま日章旗が現れなぞすると、必ず盛な喝采かつさいを送つた。中には「帝国万歳」と、頓狂な声を出すものもあつた。しかし実戦に臨んで来た牧野は、そう云う連中とは没交渉に、ただにやにやと笑つていた。

「戦争もあるの通りだと、楽なもんだが、——」

彼は牛莊ニューチャンの激戦の画を見ながら、半ば近所へも聞かせるようく、こうお蓮へ話しかけた。が、彼女は不相変あいかわらず、熱心に幕へ眼をやつたまま、かすかに頷うなずいたばかりだつた。それは勿論どんな画でも、幻燈が珍しい彼女にとつては、興味があつたのに違ひなかつた。しかしそのほかにも画面の景色は、——雪の積つた城樓じょうろうの屋根だの、枯柳かれやなぎに繫つないだ兎馬うさぎうまだの、辯髮べんぱつを垂

れた支那兵だのは、特に彼女を動かすべき理由も持つていたのだつた。

寄席がはねたのは十時だつた。二人は肩を並べながら、しもうた家ばかり続いている、人気のない町を歩いて來た。町の上には半輪の月が、霜の下りた家々の屋根へ、寒い光を流していた。牧野はその光の中へ、時々 卷煙草の煙を吹いては、さつきの剣舞でも頭にあるのか、

「鞭声 肅々 夜河を渡る」などと、古臭い詩の句を微吟した
りした。

所が 横町を一つ曲ると、突然お蓮は憎えたように、牧野の外套の袖を引いた。

「びっくりさせるぜ。何だ？」

彼はまだ足を止めずに、お蓮の方を振り返った。

「誰か呼んでいるようですもの。」

お蓮は彼に寄り添いながら、気味の悪そうな眼つきをしていた。

「呼んでいる？」

牧野は思わず足を止めると、ちょいと耳を澄ませて見た。が、

寂しい往来には、犬の吠える声さえ聞えなかつた。

「空耳そらみみだよ。何が呼んでなんぞいるものか。」

「氣のせいですかしら。」

「あんな幻燈を見たからじやないか？」

八

寄席へ行つた翌朝だつた。お蓮は房楊枝を啣えながら、顔を洗いに縁側へ行つた。縁側にはもういつもの通り、銅の耳に湯を汲んだのが、鉢前^{はちまえ}の前に置いてあつた。

冬枯^{ふゆがれ}の庭は寂しかつた。庭の向うに続いた景色も、曇天を映した川の水と一しょに、荒涼を極めたものだつた。が、その景色が眼にはいると、お蓮は嗽^{うが}いを使いがら、今まで全然忘れていた昨夜^{ゆうべ}の夢を思い出した。

それは彼女がたつた一人、暗い藪^{やぶ}だか林だかの中を歩き廻つてゐる夢だつた。彼女は細い路^{たど}を辿りながら、「どうどう私の念^{ねんり}

力^きが届いた。東京はもう見渡す限り、人気^{ひとけ}のない森に変つてい
る。きっと今に金^{きん}さんにも、遇う事が出来るのに違ひない。「——
——そんな事を思い続けていた。するとしばらく歩いている内に、
大砲の音や小銃の音が、どことも知らず聞え出した。と同時に木
々の空が、まるで火事でも映すように、だんだん赤濁りを帯び始
めた。「戦争だ。戦争だ。」——彼女はそう思いながら、一生懸
命に走ろうとした。が、いくら氣^き負つて見ても、何故か一向走れ
なかつた。……

お蓮は顔を洗つてしまふと、手^{ちょう}水^ずを使うために肌^{はだ}を脱いだ。
その時何か冷たい物が、べたりと彼女の背中に触れた。
「しつ！」

彼女は格別驚きもせず、艶なまめいた眼をうしろへ投げた。そこには小犬が尾を振りながら、しきりに黒い鼻を舐なめ廻していた。

九

牧野はその後二三日すると、いつもより早めに妾宅へ、田宮と云う男と遊びに来た。ある有名な御用商人の店へ、番頭格に通つている田宮は、お蓮れんが牧野に囮かよわれるのについても、いろいろ世話をしてくれた人物だつた。

「妙なもんじやないか？ こうやつて丸まげに結ゆつていると、どうしても昔のお蓮さんとは見えない。」

田宮は明あかるいランプの光に、薄うすいも痘痕のある顔を火照ほてらせながら、向い合つた牧野へ盃さかずきをさした。

「ねえ、牧野さん。これが島しまだ田ゆに結つていたとか、赤しゃぐま熊に結つていたとか云うんなら、こうも違つちや見えまいがね、何しろ以前が以前だから、——」

「おい、おい、こここの婆さんは眼は少し悪いようだが、耳は遠くもないんだからね。」

牧野はそう注意はしても、嬉しそうにやにや笑つていた。

「大丈夫。聞えた所がわかるもんか。——ねえ、お蓮さん。あの時分の事を考えると、まるで夢のようじやありませんか。」

お蓮は眼を外らせてそのまま、膝ひざの上の小犬にからかつっていた。

「私も牧野さんに頼まれたから、一度は引き受けて見たようなものなの、万一ばれた日にや大事おおごとだと、無事に神戸こうべへ上がるまでにや、随分これでも気を揉もみましたぜ。」

「へん、そう云う危い橋なら、渡りつけているだろうに、——」

「冗談云つちやいけない。人間の密輸入はまだ一度ぎりだ。」

田宮は一盃ひとふぐいとやりながら、わざとらしい渋面じゅうめんをつくつて見せた。

「だがお蓮のこんにち今日あるを得たのは、実際君のおかげだよ。」

牧野は太い腕を伸ばして、田宮へ猪口ちょくをさしつけた。

「そう云われると恐れ入るが、とにかくあの時は弱つたよ。おまけにまた乗つた船が、ちょうど玄海げんかいへかかつたとなると、恐ろ

しいしけを食くらつてね。——ねえ、お蓮さん。」

「ええ、私はもう船も何も、沈んでしまうかと思いましたよ。」
 お蓮は田宮の酌しゃくをしながら、やつと話に調子を合わせた。が、
 あの船が沈んでいたら、今よりは反かえつて益ましかも知れない。——そ
 んな事もふと考えられた。

「それがまあこうしていられるんだから、御互様おたがいさまに仕合せでさ
 あ。——だがね、牧野さん。お蓮さんに丸鬚が似合うようになる
 と、もう一度また昔のなりに、返らせて見たい気もしやしないか
 ?」

「返らせたかつた所が、仕方がないじやないか?」

「ないがさ、——ないと云えば昔の着物は、一つもこつちへは持

つて来なかつたかい？」

「着物どころか 檵^{くしかんざし} 簪^{さんざし}までも、ちゃんと御持参になつてゐる。いくら僕が止めと云つても、一向御取上げにならなかつたんだから、——」

牧野はちらりと長火鉢越しに、お蓮の顔へ眼を送つた。お蓮はその言葉も聞えないよう、鉄瓶のぬるんだのを気にしていた。

「そいつはなおさら好都合だ。——どうです？ お蓮さん。その内に一つなりを変えて、御酌を願おうじやありませんか？」

「そうして君も序^{ついで}ながら、昔^{むかし}馴染^{なじみ}を一人思い出すか。」

「さあ、その昔馴染みと云うやつがね、お蓮さんのように好縹^{ハオピイ}^{チエ}緥^ヂだと、思い出し甲斐^{がい}もあると云うものだが、——」

田宮は薄痘痕うすいものある顔に、撲くすぐつたそうな笑いを浮べながら、すり芋いもを箸はしに搦からんでいた。……

その晩田宮が帰つてから、牧野は何も知らなかつたお蓮に、近々陸軍を止め次第、商人になると云う話をした。辞職の許可が出来すれば、田宮が今使われている、ある名高い御用商人が、すぐには高給で抱えてくれる、——何でもそう云う話だつた。

「そうすりやここにいなくとも好いいから、どこか手広い家うちへ引っ越そうじやないか？」

牧野はさも疲れたように、火鉢の前へ寝ころんだまま、田宮が土産みやげに持つて來たマニラの葉巻を吹かしていた。

「この家うちだつて沢山ですよ。婆やと私と二人ぎりですもの。」

お蓮は意地のきたない犬へ、残り物を当てがうのに忙しかつた。

「そうなつたら、おれも一しょにいるさ。」

「だつて御新造ごしんぞうがいるじやありませんか？」

「嘆かかあかい？」嘆とも近々別れる筈だよ。」

牧野の口調くちようや顔色では、この意外な消息しょうそくも、満更冗談とは思われなかつた。

「あんまり罪な事をするのは御止しなさいよ。」

「かまうものか。おのれ己おのれに出でて己に返るさ。おれの方ばかり悪いんじやない。」

牧野は険しい眼けわをしながら、やけに葉巻をすばすばやつた。お

蓮は寂しい顔をしたなり、しばらくは何とも答えなかつた。

十

「あの白犬が病みついたのは、——そうそう、田宮の旦那たみや だんなが御見
えになつた、ちょうどその明くる日あですよ。」

お蓮れんに使われていた婆さんは、私の友人のKと云う医者に、こ
う当時の容子ようすを話した。

「大方おおかた 食しょく 中あたりか何かだつたんでしよう。始めは毎日長火鉢
の前に、ぼんやり寝て いるばかりでしたが、その内に時々どうか
すると、畳をよごすようになつたんです。御新造ごしんぞうは何しろ子供の
ように、可愛がつていらしつた犬ですから、わざわざ牛乳を取つ

てやつたり、宝丹ほうたんを口へ呴ふくませてやつたり、随分大事になさいました。それに不思議はないんです。ないんですけど、嫌いやありませんか？ 犬の病氣が悪くなると、御新造が犬と話をなさるのも、だんだん珍しくなくなつたんです。

「そりや話をなさると云つても、つまりは御新造が犬を相手に、長々と独り語ごとをおつしやるんですけど、夜更けよふにでもその声が聞えて御覧なさい。何だか犬も人間のように、口きを利いていそうな気がして、あんまり好よい気はしないもんですよ。それでなくつても一度なぞは、あるからつ風かぜのひどかつた日に、御使いに行つて帰つて来ると、——その御使いも近所の占うらない者の所しゃへ、犬の病氣を見て貰もらいに行つたんですが、——御使いに行つて帰つて来ると、

障子しようじのがたがた云う御座敷に、御新造の話し声が聞えるんでしょう。こりや旦那様でもいらしつたかと思つて、障子の隙間から覗いて見ると、やつぱりそこにはたつた一人、御新造がいらつしやるだけなんです。おまけに風に吹かれた雲が、御日様の前を飛ぶからですが、膝へ犬をのせた御新造の姿が、しつきりなしに明るくなつたり暗くなつたりするじゃありませんか？ あんなに気味の悪かつた事は、この年になつてもまだ二度とは、出つくわした覚えがないくらいですよ。

「ですから犬が死んだ時には、そりや御新造には御氣の毒でしたが、こちらは内々ないないほつとしたもんです。もつともそれが嬉しかつたのは、犬が粗そそうをするたびに、掃除そうじをしなければならなかつ

た私ばかりじやありません。旦那様もその事を御聞きになると、
厄介払い^{やっかいぱら}をしたと云うように、にやにや笑つて御出でになりました。
 犬ですか？ 犬は何でも、御新造はもとより、私もまだ起
 きない内に、鏡台^{きょううだい}の前へ仆たおれたまま、青い物を吐いて死んで
 いたんです。気がなさそうに長火鉢の前に、寝てばかりいるよう
 になつてから、かれこれ半月にもなりましたかしら。……」

ちょうど薬研堀^{やげんぼり}の市^{いち}の立つ日、お蓮は大きな鏡台の前に、息
 の絶えた犬を見出した。犬は婆さんが話した通り、青い吐物^{とぶつ}の流
 れた中に、冷たい体を横たえていた。これは彼女もとうの昔に、
 覚悟をきめていた事だつた。前の犬には生別れ^{いきわかれ}をしたが、今度
 の犬には死別れ^{しにわか}をした。所詮^{しょせん}犬は飼えないので、持つて生ま

れた因縁いんねんかも知れない。——そんな事がただ彼女の心へ、絶望的な静かさをのしかからせたばかりだつた。

お蓮はそこへ坐つたなり、茫然と犬の屍骸しへいを眺めた。それから懶ものうい眼を挙げて、寒い鏡おもての面を眺めた。鏡には畳に仆たおれた犬が、彼女と一しょに映つていた。その犬の影をじつと見ると、お蓮は目まいでも起つたように、突然両手に顔を掩おおつた。そうしてかすかな叫び声を洩らした。

鏡の中の犬の屍骸は、いつか黒かるべき鼻の先が、赭あかい色に變つていたのだつた。

妾宅の新年は寂しかつた。門には竹が立てられたり、座敷には蓬萊が飾られたりしても、お蓮は独り長火鉢の前に、屈託らしい頬杖をついては、障子の日影が薄くなるのに、懶い眼ばかり注いでいた。

暮に犬に死なれて以来、ただでさえ浮かない彼女の心は、ややともすると発作的な憂鬱に襲われ易かつた。彼女は犬の事ばかりか、未にわからない男の在りかや、どうかすると顔さえ知らない、牧野の妻の身の上までも、いろいろ思い悩んだりした。と同時にまたその頃から、折々妙な幻覚にも、悩まされるようになり始めた。――

ある時は床へはいつた彼女が、やつと眠に就こうとすると、突然何かがのつたように、夜着の裾がじわりと重くなつた。小犬はまだ生きていた時分、彼女の蒲団の上へ来ては、よくごろりと横になつた。——ちょうどそれと同じように、柔かな重みがかかつたのだつた。お蓮はすぐに枕から、そつと頭を浮かせて見た。が、そこには搔卷かいまきの格子模様こうしもようが、ランプの光に浮んでいるほかは、何物もいるとは思われなかつた。……

またある時は鏡台の前に、お蓮が髪を直していると、鏡へ映つた彼女の後うしろを、ちらりと白い物が通つた。彼女はそれでも気をとめず、水々しい鬚びんを搔かき上げていた。するとその白い物は、前とは反対の方向へ、もう一度咄嗟とつさに通り過ぎた。お蓮は櫛くしを持つ

たまま、とうとう後うしろを振り返つた。しかし明あかるい座敷の中には、何も生き物のけはいはなかつた。やつぱり眼のせいだつたかしら、——そう思いながら、鏡へ向うと、しばらくの後のち白い物は、三度彼女の後うしろを通つた。……

またある時は長火鉢の前に、お蓮が独り坐つてゐると、遠い外の往来おうらいに、彼女の名を呼ぶ声が聞えた。それは門の竹の葉が、ざわめく音に交りながら、たつた一度聞えたのだつた。が、その声は東京へ来ても、始終心にかかるつていた男の声に違ひなかつた。お蓮は息をひそめるように、じつと注意深い耳を澄ませた。その時また往来に、今度は前よりも近ちかぢか々と、なつかしい男の声が聞えた。と思うといつのまにか、それは風に吹き散らされる犬の声

に変つていた。……

またある時はふと眼がさめると、彼女と一つ床の中に、いない
筈の男が眠つていた。迫つた額、長い睫毛、——すべてが夜半の
ランプの光に、寸分も以前と変らなかつた。左の眼尻に黒子が
あつたが、——そんな事さえ調べて見ても、やはり確かに男だつ
た。お蓮は不思議に思うよりは、嬉しさに心を躍らせながら、そ
のまま体も消え入るように、男の頸へすがりついた。しかし眠を
破られた男が、うるさそうに何か呟いた声は、意外にも牧野に違
いなかつた。のみならずお蓮はその刹那に、実際酒臭い牧野の頸
へ、しつかり両手をからんでいる彼女自身を見出したのだつた。

しかしそう云う幻覚のほかにも、お蓮の心を擾るような事件は、

現実の世界からも起つて來た。と云うのは松もとれない内に、噂に聞いていた牧野の妻が、突然訪ねて來た事だつた。

十二

牧野の妻まきのが訪れたのは、生憎あいにく例の雇やとい婆ばあさんが、使いに行つてゐる留守るすだつた。案内を請う声に驚かされたお蓮は、やむを得ず氣のない体を起して、薄暗い玄関へ出かけて行つた。すると北向きの格子戸こうしどが、軒さきの御飾りすかりを透せてゐる、——そこにひどく顔色の悪い、眼鏡めがねをかけた女が一人、余り新しくない肩掛れんをしたまま、俯向うつむき勝たたずに佇んでいた。

「どなた様でござりますか？」

お蓮はそう尋ねながら、相手の正体を直覚していた。そうしてこの根の抜けた丸髷に、小紋の羽織の袖を合せた、どこか影の薄い女の顔へ、じつと眼を注いでいた。

「私は——」

女はちよいとためらった後、やはり俯向き勝に話し続けた。

「私は牧野の家内でございます。滝と云うものでござります。」

今度はお蓮が口ごもつた。

「さようでございますか。私は——」

「いえ、それはもう存じて居ります。牧野が始終御世話になりますそうで、私からも御礼を申し上げます。」

女の言葉は穏やかだつた。皮肉らしい調子なぞは、不思議なほど罩つていなかつた。それだけまたお蓮は何と云つて好よいか、挨拶いさつのしよう困るのだつた。

「つきましては今こんにち日は御年始かたがた、ちと御願いがあつて参りましたんですが、——」

「何でござりますか、私に出来る事でございましたら——」

まだ油断をしなかつたお蓮は、ほぼその「御願い」もわかりそ
うな気がした。と同時にそれを切り出された場合、答うべき文句
も多そうな気がした。しかし伏目勝ふしめちな牧野の妻が、静しづかに述べ始めた言葉を聞くと、彼女の予想は根本から、間違つていた事が明
かになつた。

「いえ、御願いと申しました所が、大した事でもございませんが、
——実は近々きんきんに東京中が、森になるそうでございますから、その
節はどうか牧野同様、私も御宅へ御置き下さいます。御願いと云
うのはこれだけでござります。」

相手はゆつくりこんな事を云つた。その容子ようすはまるで彼女の言
葉が、いかに気違ちがいじみているかも、全然氣づいていないようだ
った。お蓮は呆氣あつけにとられたなり、しばらくはただ外光そむに背いた、
この陰気な女の姿を見つめているよりほかはなかつた。

「いかがでございましょう？ 置いて頂けましようか？」

お蓮は舌が剛ばつたように、何とも返事が出来なかつた。いつ
か顔を擡もたげた相手は、細々と冷たい眼を開きながら、眼鏡めがね越しに

彼女を見つめている、——それがなおさらお蓮には、すべてが一場の悪夢^{あくむ}のような、気味の悪い心地を起させるのだつた。

「私はもとよりどうなつても、かまわない体でございますが、万一路頭に迷うような事がありましては、二人の子供が可哀^{かわい}そうでござります。どうか御面倒でもあなたの御宅へ、お置きなすつて下さいまし。」

牧野の妻はこう云うと、古びた肩掛けに顔を隠しながら、突然しくしく泣き始めた。すると何故か黙っていたお蓮も、急に悲しい氣がして來た。やつと金さんにも遇える時が來たのだ、嬉しい。嬉しい。——彼女はそう思いながら、それでも春着の膝の上へ、やはり涙を落している彼女自身を見出しだつた。

が、何分か過ぎ去つた後のち、お蓮がふと気がついて見ると、薄暗い北向きの玄関には、いつのまに相手は帰つたのか、誰も人影が見えなかつた。

十三

七草の夜よ、牧野まきのが妾宅へやつて来ると、お蓮れんは早速彼の妻かれが、訪ねて來たいきさつを話して聞かせた。が、牧野は案外平然と、彼女に耳を借したまま、マニラの葉巻ばかり燻くゆらせていた。
 「御新造はどうかしているんですよ。」

いつか興奮し出したお蓮は、苛立たしい眉まゆをひそめながら、剛

情に猶も云い続けた。

「今之内に何とかして上げないと、取り返しのつかない事になりますよ。」

「まあ、なつたらなつた時の事さ。」

牧野は葉巻の煙の中から、薄眼に彼女を眺めていた。

「嘔の事なんぞを案じるよりや、お前こそ体に気をつけるが好い。」

何だかこの頃はいつ来て見ても、ふさいでばかりいるじやないか

？」

「私はどうなつても好いんですけど、——」

「よくはないよ。」

お蓮は顔を曇らせたなり、しばらくは口を噤んでいた。が、突

然涙ぐんだ眼を擧げると、

「あなた、後生ごしううですから、御新造ごしんぞうを捨てないで下さい。」と云つた。

牧野は呆氣あつけにとられたのか、何とも答を返さなかつた。

「後生ですから、ねえ、あなた——」

お蓮は涙を隠すように、黒縑くろじゆ子の襟へ顎あごを埋めうずめた。

「御新造は世の中にあなた一人が、何よりも大事なんですもの。
それを考えて上げなくつちや、薄情すぎると云うもんですよ。私の國でも女と云うものは、——」

「好いよ。好いよ。お前の云う事はよくわかつたから、そんな心配なんぞはしない方が好いよ。」

葉巻はまき

子供だま

だま

を吸うのも忘れた牧野は、子供を欺すようにこう云つた。
 「一体この家うちが陰気だからね、——そうそう、この間はまた犬が死んだりしている。だからお前も気がふさぐんだ。その内にどこか好い所があつたら、早速引越ししてしまおうじゃないか？ そうして陽気に暮すんだね、——何、もう十日も経たちさえすりや、おれは役人をやめてしまうんだから、——」

お蓮はほとんどその晩中、いくら牧野が慰めても、浮かない顔か
 色いろを改いめなかつた。……

「御新造ごしんぞうの事では旦那様だんなさまも、随分御心配なすつたもんですが、

|

Kにいろいろ尋かれた時、婆さんはまた当時の容子ようすをこう話し

たとか云う事だつた。

「何しろ今度の御病氣は、あの時分にもうきざしていたんですから、やつぱりまあ旦那様始め、御^{おあきら}諦めになるほかはありますまい。現に本宅の御新造が、不意に横網^{よこあみ}へ御出でなすつた時でも、わたくし私が御使いから帰つて見ると、こちらの御新造は御玄関先へ、ぼんやりとただ坐つていらつしやる、——それを眼鏡越しに睨みながら、あちらの御新造はまた上^{あが}ろうともなさらず、悪^{わる}丁寧^{でいねい}な嫌味^{やみ}のありつけを並べて御出でなさる始末^{しまつ}なんです。

「そりや御主人が毒づかれるのは、蔭で聞いている私にも、好い氣のするもんじやありません。けれども私がそこへ出ると、余計事がむづかしいんです。——と云うのは私も四五年前^{まえ}には、御本

宅に使われていたもんですから、あちらの御新造に見つかつたが最後、反かえつて先さき様の御腹立ちを煽あおる事になるかも知れますまい。そんな事があつては大変ですから、私は御本宅の御新造が、さんざん悪あく態たいを御つきになつた揚句あげく、御帰りになつてしまふまでは、とうとう御玄関の襖ふすまの蔭から、顔を出さずにしました。

「ところがこちらの御新造は、私の顔を御覧になると、『婆や、今し方御新造が御見えなすつたよ。私なんぞの所へ来ても、嫌味一つ云わないんだから、あれがほんとうの結構人けつこうじんだろうね。』と、こうおつしやるじやありませんか？ そうかと思うと笑いながら、『何でも近々に東京中が、森になるつて云つていたつけ。

可哀そうにあの人は、気が少し変なんだよ。』と、そんな事さえ

おっしゃるんですよ。……」

十四

しかしお蓮の憂鬱は、二月にはいつて間もない頃、やはり本所の松井町にある、手広い二階家へ住むようになつても、不相変晴れそうな気色はなかつた。彼女は婆さんとも口を利かず、大抵は茶の間にたつた一人、鉄瓶のたぎりを聞き暮していた。

するとそこへ移つてから、まだ一週間も経たないある夜、もうどこかで飲んだ田宮が、ふらりと妾宅へ遊びに來た。ちようど一杯始めていた牧野は、この飲み仲間の顔を見ると、早速手にあつ

た猪口ちよくをさした。田宮はその猪口を貰う前に、襯衣シャツを覗かせた懷ふところから、赤い缶詰かんづめを一つ出した。そうしてお蓮の酌を受けながら、「これは御土産おみやげです。お蓮夫人。これはあなたへ御土産です。」と云つた。

「何だい、これは？」

牧野はお蓮が礼を云う間に、その缶詰を取り上げて見た。

「貼紙ペーパーを見給え。臍肭獸おつとせいだよ。臍肭獸の缶詰さ。——あなたは氣のふさぐのが病だつて云うから、これを一つ献上します。産前、産後、婦人病いっさい一切によろしい。——これは僕の友だちに聞いた能書きだがね、そいつがやり始めた缶詰だよ。」

田宮は唇を嘗めまわしては、彼等二人を見比べていた。

「食えるかい、お前、**脰脰獸**なんぞが？」

お蓮は牧野にこう云われても、無理にちよいと口元へ、微笑を見せたばかりだった。が、田宮は手を振りながら、すぐにその答えを受けた。

「大丈夫。大丈夫だとも。——ねえ、お蓮さん。この**脰脰獸**と云うやつは、**牡**^{おす}が一匹いる所には、**牝**^{めす}が百匹もくつついている。まあ人間にするど、牧野さんと云う所です。そう云えば顔も似ていますな。だからです。だから一つ牧野さんだと思つて、——可愛い牧野さんだと思つて御上んなさい。」

「何を云つてゐるんだ。」

牧野はやむを得ず苦笑した。

「牡が一匹いる所に、——ねえ、牧野さん、君によく似ているだろう。」

田宮は薄痘痕うすいものある顔に、一ぱいの笑いを浮べたなり、委細いさいかまわざしやべり続けた。

「今日僕の友だちに、——この缶詰屋に聞いたんだが、脰肭獸おつとせいと云うやつは、牡同志が牡を取り合うと、——そうそう脰肭獸の話よりや、今夜は一つお蓮さんに、昔のなりを見せて貰もらうんだつた。どうです？ お蓮さん。今こそお蓮さんなんぞと云つてあるが、お蓮さんは世を忍ぶ仮の名さ。ここは一番音羽屋おとわやで行きたいね。お蓮さんとは——」

「おい、おい、牡を取り合うとどうするんだ？ その方をまず伺

いたいね。」

迷惑らしい顔をした牧野は、やつともう一度脰肭獸おつとせいの話へ、危険な話題を一転させた。が、その結果は必ずしも、彼が希望していたような、都合の好いものではなさそうだつた。

「牝を取り合うとか？ 牝を取り合うと、大喧嘩をするんだそうだ。その代りだね、その代り正々堂々とやる。君のように暗打ちなんぞは食わせない。いや、こりや失礼。禁句きんく禁句きんく金看板きんかんばんの甚じ九郎だつけ。——お蓮さん。一つ、献じましよう。」

田宮は色を変えた牧野に、ちらりと顔を睨にらまれると、てれ隠しにお蓮さかづきへ盃ぶをさした。しかしお蓮は無氣味ぶきみなほど、じつと彼を見つめたぎり、手も出そとはしなかつた。

十五

お蓮が床を抜け出したのは、その夜の三時過ぎだつた。彼女は二階の寝間を後に、そつと暗い梯子を下りると、手さぐりに鏡台の前へ行つた。そうしてその抽斗から、剃刀の箱を取り出した。

「牧野め。牧野の畜生め。」

お蓮はそう呟きながら、静に箱の中の物を抜いた。その拍子に剃刀の匀においが、磨とぎ澄ました鋼の匀はがねが、かすかに彼女の鼻を打つた。いつか彼女の心の中には、狂暴な野性が動いていた。それは彼

女が身を売るまでに、邪慳な繼母との争いから、荒むままに任せた野性だつた。白粉が地肌を隠したように、この数年間の生活が押し隠していた野性だつた。……

「牧野め。鬼め。二度の日の目は見せないから、——」

お蓮は派手な長襦袢ながじゅばんの袖に、一挺の剃刀を蔽おおつたなり、鏡台の前に立ち上つた。

すると突然かすかな声が、どこからか彼女の耳へはいった。

「御止し。御止し。」

彼女は思わず息を呑んだ。が、声だと思つたのは、時計の振子ふりこが暗い中に、秒を刻んでいる音らしかつた。

「御止し。御止し。御止し。」

しかし梯子はしごを上りかけると、声はもう一度お蓮とらを捉えた。彼女はそこへ立ち止りながら、茶の間まの暗闇を透かして見た。

「誰だい？」

「私。私だ。私。」

声は彼女と仲が好かつた、朋輩の一人に違ひなかつた。

「一枝さんかい？」

「ああ、私。」

「久しぶりだねえ。お前さんは今どこにいるの？」

お蓮はいつか長火鉢の前へ、昼間のように坐つていた。

「御止し。御止しよ。」

声は彼女の間に答えず、何度も同じ事を繰返すのだった。

「何故なぜまたお前さんまでが止めるのさ？ 殺したつて好いじやないか？」

「お止し。生きているもの。生きているよ。」

「生きている？ 誰が？」

そこに長い沈黙があつた。時計はその沈黙の中にも、休みない振子ふりこを鳴らしていた。

「誰が生きているのさ？」

しばらく無言むごんが続いた後のち、お蓮がこう問い合わせ直すと、声はやつと彼女の耳に、懐しい名前さきやを囁いてくれた。

「金きん——金さん。金さん。」

「ほんとうかい？ ほんとうなら嬉しいけれど、——」

お蓮は頬杖ほおづえをついたまま、物思わしそうな眼つきになつた。
 「だつて金きんさんが生きているんなら、私に会いに来そうなもんじ
 ゃないか？」

「来るよ。 来るとさ。」

「来るつて？ いつ？」

「明日あした。 弥勒寺みろくじへ会いに来るとさ。 弥勒寺みろくじへ。 明日あしたの晩。」

「弥勒寺みろくじつて、弥勒寺みろくじ橋ばしだらうねえ。」

「弥勒寺橋みろくじばしへね。 夜来る。 来るとさ。」

それぎり声は聞こえなくなつた。が、 長襦袢ながじゅばん一つのお蓮は、
 夜明前あいだの寒さも知らないように、長い間じつと坐つていた。

お蓮は翌日^{よくじつ}の午過ぎまでも、二階の寝室を離れなかつた。が、四時頃やつと床^{とこ}を出ると、いつもより念入りに化粧をした。それから芝居でも見に行くように、上着も下着もことごとく一番好い着物を着始めた。

「おい、おい、何だつてまたそんなにめかすんだい？」

その日は一日店へも行かず、妾宅にごろごろしていた牧野^{まきの}は、風俗画報^{ふうぞくがほう}を拝げながら、不審そうに彼女へ声をかけた。

「ちよいと行く所がありますから、——」

お蓮は冷然と鏡台の前に、鹿の子^この帶上げを結んでいた。

「どこへ？」

「弥勒寺橋まで行けば好いんです。」

「弥勒寺橋？」

牧野はそろそろ訝るよりも、不安になつて来たらしかつた。それがお蓮には何とも云えない、愉快な心もちを唆^{そそ}るのだつた。

「弥勒寺橋に何の用があるんだい？」

「何の用ですか、——」

彼女はちらりと牧野の顔へ、侮蔑^{ぶべつ}の眼の色を送りながら、静に帶止めの金物^{かなもの}を合せた。

「それでも安心して下さい。身なんぞ投げはしませんから、——」「莫迦^{ばか}な事を云うな。」

牧野はばたりと畳の上へ、風俗画報を抛り出すと、忌々しそうに舌打ちをした。……

「かれこれその晩の七時頃だそうだ。——」

今までの事情を話した後のちわたくし、私の友人のKと云う医者は、徐おもむろにこ

う言葉を続けた。

「お蓮は牧野が止めるのも聞かず、たつた一家うちを出て行つた。

何しろ婆さんなぞが心配して、いくら一しょに行きたいと云つても、当人がまるで子供のように、一人にしなければ死んでしまうと、駄々だだをこねるんだから仕方がない。が、勿論お蓮一人、出してやれたもんじやないから、そこは牧野が見え隠れに、ついて行く事にしたんだそうだ。

「ところが外へ出て見ると、その晩はちょうど弥勒寺橋の近くに、
薬師の縁日えんにちが立っている。だから二つ目の往来おうらいは、いくら寒
い時分でも、押し合わないばかりの人通りだ。これはお蓮の跡を
つけるには、都合つごうが好かつたのに違いない。牧野がすぐ後うしろを歩き
ながら、とうとう相手に気づかれなかつたのも、畢竟ひつきようは縁日の
御蔭なんだ。

「往来にはずつと両側に、縁日えんにち商人あきんどが並んでいる。そのカン
テラやランプの明りに、飴屋あめやの渦巻の看板だの豆屋の赤い日傘だ
のが、右にも左にもちらつくんだ。が、お蓮はそんな物には、全
然側目わきめもふらないらしい。ただ心もち俯向うつむいたなり、さつさと人
ごみを縫つて行くんだ。何でも遅れずに歩くのは、牧野にも骨が

折れたそうちだから、余程先を急いでいたんだろう。

「その内に弥勒寺橋の袂へ来ると、お蓮はやつと足を止めて、茫然とあたりを見廻したそうだ。あすこには河岸へ曲った所に、植木屋ばかりが続いている。どうせ縁日物だから、大した植木がある訳じやないが、ともかくも松とか檜とかが、ここだけは人足の疎らな通りに、水々しい枝葉を茂らしているんだ。

「こんな所へ來たは好いが、一体どうする気なんだろう?」——牧野はそう疑いながら、しばらくは橋づめの電柱の蔭に、妾の容子を窺つていた。が、お蓮は不相変、ぼんやりそこに佇んだまま、植木の並んだのを眺めている。そこで牧野は相手の後へ、忍び足にそつと近よつて見た。するとお蓮は嬉しそうに、何度もこう云

うひとり語ごとつぶやを呟いてたと云うじゃないか?——『森になつたんだねえ。どうとう東京も森になつたんだねえ。』……

十七

「それだけならばまだ好よいが、——」

Kはさらに話し続けた。

「そこへ雪のような小犬れんが一匹、偶然人ごみを抜けて来ると、お蓮はいきなり両手を伸ばして、その白犬を抱だき上げたそうだ。そうして何を云うかと思えば、『お前も來てくれたのかい? 隨分ここまで遠かつたろう。何しろ途中には山もあれば、大きな海

もあるんだからね。ほんとうにお前に別れてから、一日も泣かず
にいた事はないよ。お前の代わりに飼つた犬には、この間死なれて
しまうしさ。』なぞと、夢のような事をしやべり出すんだ。が、
小犬は人懐ひとなつこいのか、啼なきもしなければ噛かみつきもしない。た
だ鼻だけ鳴らしては、お蓮の手や頬ほおを舐なめ廻すんだ。

「こうなると見てはいられないから、牧野はどうとう顔を出した。
が、お蓮は何と云つても、金さんきんさんがここへ来るまでは、決して家うち
へは帰らないと云う。その内に縁日の事だから、すぐにまわりへ
は人だかりが出来る。中には『やあ、別嬪べっぴんの気違いたがいだ』と、大
きな声を出すやつさえあるんだ。しかし犬好きなお蓮には、久し
ぶりに犬を抱だいたのが、少しは氣休めになつたんだろう。ややし

ばらく押し問答をした後(のち)、ともかくも牧野の云う通り一応は家へ帰る事に、やつと話が片附いたんだ。が、いよいよ帰るとなつても、野次馬(やじうま)は容易に退くもんじやない。お蓮もまたどうかすると、弥勒寺橋(みろくじばし)の方へ引つ返そうとする。それを宥めたり賺したりしながら、松井町(まついちょう)の家へつれて来た時には、さすがに牧野も外(うち)套(すか)の下が、すっかり汗になつていたそうだ。……」

お蓮は家(いえ)へ帰つて来ると、白い子犬を抱いたなり、二階の寝室(のぼ)へ上つて行つた。そして真暗な座敷の中へ、そつとこの憐れな動物を放した。犬は小さな尾を振りながら、嬉しそうにそこらを歩き廻つた。それは以前飼つていた時、彼女の寝台から石畳の上へ、飛び出したのと同じ歩きぶりだつた。

「おや、——」

座敷の暗いのを思い出したお蓮は、不思議そうにあたりを見廻した。するといつか天井からは、火をともした瑠璃燈^{るりとう}が一つ、彼女の真上に吊^{つりさが}下つっていた。

「まあ、綺麗だ事。まるで昔に返つたようだねえ。」

彼女はしばらくはうつとりと、燐^{きら}びやかな燈^{ともしび}火^ひを眺めていた。が、やがてその光に、彼女自身の姿を見ると、悲しそうに二三度頭^{かしら}を振つた。

「私は昔の蕙^{けいれん}蓮^{れん}じやない。今はお蓮と云う日本人だもの。金^{きん}さんも会いに来ない筈だ。けれども金さんさえ来てくれれば、——」

ふと頭を擡げたお蓮は、もう一度驚きの声を洩らした。見ると小犬のいた所には、横になつた支那人が一人、四角な枕へ肘をのせながら、悠々と鴉片を燻らせている！ 迫つた額、長い睫毛、それから左の目尻の黒子。——すべてが金に違ひなかつた。のみならず彼はお蓮を見ると、やはり煙管を啞えたまま、昔の通り涼しい眼に、ちらりと微笑を浮べたではないか？

「御覧。東京はもうあの通り、どこを見ても森ばかりだよ。」

成程二階の亞字欄の外には、見慣ない樹木が枝を張つた上に、刺繡の模様にありそうな鳥が、何羽も気軽に嘲つてゐる、

——そんな景色を眺めながら、お蓮は懐しい金の側に、一夜中恍惚と坐つていた。
……

「それから一日か二日すると、お蓮——本名は孟蕙蓮^{もうけいれん}は、もうこのK脳病院の患者^{かんじや}の一人になつていたんだ。何でも日清戦争中は、威海衛^{いかいえい}のある妓館^{ぎかん}とかに、客を取つていた女だそうだが、——何、どんな女だつた？ 待ち給え。ここに写真^があるから。」Kが見せた古写真には、寂しい支那服の女が一人、白犬と一しょに映つていた。

「この病院へ來た当座は、誰が何と云つた所が、決して支那服を脱^ぬがなかつたもんだ。おまけにその犬が側にいないと、金さん金さんと喚^{わめ}き立てるじやないか？ 考えれば牧野も可哀^{かな}うな男さ。蕙蓮^{けいれん}を妾^{めかけ}にしたと云つても、帝国軍人の片^{かた}わ^われたるものが、戦争後すぐに敵国人を内地へつれこもうと云うんだから、人知れな

い苦勞が多かつたろう。——え、金はどうした？ そんな事は尋きくだけ野暮だよ。僕は犬が死んだのさえ、病氣かどうかと疑つて
いるんだ。』

(大正九年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

奇怪な再会

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>